

小学生の戦争体験

久留米市 矢ヶ部 春子

まだ国民学校に入学してない時の開戦だったが、父母や大人たちが『アメリカと戦争して勝つのだろうか』と話しているのをかすかに覚えている。

そして国民学校に入学、『何事も兵隊サンの苦勞を思え』との耐乏生活で、町の中から全ての物が消えていったのです。お菓子屋さんがなくなり、魚屋がなくなり、といった具合で品物が回ってこなくなり、商売ができなくなったのです。子供心にケーキ、シュークリーム、チョコレートがどんなに食べたかったか、終戦のころは甘味という物が全然ありませんでしたから。

衣服も初めは衣料切符で買わなくてはなりませんでしたが、終戦のころは着る物、はく物がなくなり、母の着物から作ったもんぺではだしで通学しておりました。道の両側は皆畑で、学校の運動場も畑になっておりました。

学校では落穂拾い、イナゴ取り等しましたが、私たちの口には入らず、兵隊サンのためにとやることでした。憎い米英をやっつけて下さいと慰問文や慰問袋を外地の兵隊サンに送りました。絶対戦争には負けられません。負けたら皆殺されます。だから皆でがんばらなくてはなりません。『日本は神国ですからいざという時は神風が吹いて、アメリカの飛行機や船を沈没させます』と学校で言われました。

我が家は自動車部品業でしたが、車が全部軍隊に取られ部品も仕入れができなくなり、電話も軍に取られ商売はできなくなりました。父も召集され軍隊に入りました。久留米の軍隊に入っておりました。母と重箱にかしわごはんのおにぎりをつめて面会にいったところ、父ががつがつと食べるので、父も満足には食べてないのだろうと悲しく思った事を覚えております。

久留米の空襲は8月11日であと4日で敗戦という日でしたが、私たち兄弟の通学路が全て燃え、もし夏休みでなかったら私たち子供たちの命はなかつただろうと父や母たちが言っておりました。始めて最後の空襲でした。当時家には庭に一つ、畑に一つ、計二つの防空壕がありましたが、こわくていざと言う時は入りもしませんでした。押入れに入っておりましたが、もし家が焼けでもしたらあぶないということで、泣いている弟や妹の手を引いて裏の里芋畑に逃げました。ちょうど畑のトマトは一つ真赤にうれていましたので、泣いている弟に取ってやったのははっきり覚えております。母は昭和19年6月生の弟を抱いており、姉はおひつを風呂敷に包んだ物を持っておりました。近所の人も恐くなられたのでしょうか、皆、里芋畑に来られ畑がにぎやかになり、少し安心しました。

幸いにも家の周辺は空襲に会わず、里芋の大きな葉のかげに座りこんでおりました。葉の陰で敵にも見つからないだろうと言うことでした。遠くではさかんに家が燃えており、煙が上がっており、空が暗くなって黒い雨が一時的ではありますが降って来ました。B29からは、ピラもまかれ、避難している里芋畑の上にもピラが落ちて来ました。それには地球が書かれ、そ

の上でアメリカとソ連が握手しており、早く戦争を止めないと日本は老人と女と子供たちばかりになると書いてありました。アメリカの悪口ばかり聞かされておりましたが、このビラのいつている事は本当ではないだろうかと思ったものです。

当時は食物にも不自由しておりました。品種の関係か今のように南瓜もさつま芋も美味しくなく、水分の多いぐちゃっとした芋や南瓜で、それをさいの目に切り、おかゆに混ぜて食べていた。うどん等も干めんでそれも色が黒く、長さも2～3cmぐらいしかないもので短めんと呼んでいた。その他、大豆から油を取った後の脱油大豆やクズ粉が配給されていた。調味料等も満足になく、喉に通らないようなものを食べていた。学校から食べられる草を取ってきなさいと言われた時には、さすがに『こんな事をしていて日本は戦争に勝つのだろうか』と思ったものだ。数日して草の入ったパンを学校からもらって来た。学校で乾パンの配給もあったが乾パンはごちそうだった。

福岡の大空襲は夜だった。夜の火事は近くに見えると言うが、北の空が真っ赤になり、小郡あたりが空襲だと思っていた。母も大変おどろいたようだ。夜の空襲の時は私たち子供はたいてい起こされなかったが、この時は起こされた上当時のよい服に着替えさせられ、茶筒に入っていたいり豆も食べさせてくれた。父も兵隊に取られて家にいなかったのも、死を覚悟していたかも知れない。私の友達は親戚が福岡におられたので、西鉄電車のレール沿いに歩いてお父さんとお兄さんが福岡まで行かれたそうだ。福岡はひどかったそうだ。

敗戦の日は私は小学3年生で夏休みでした。この時は父は軍隊から帰ってきて家におりました。今日は重大放送があるからと、故障したラジオを修理するため部品集めに大変でした。当時隣組長をしていた父は九州電力でわけてもらったという真空管をはめかえ、天皇陛下のお言葉があると言って、畳一枚離れて正座して聞きなさいと言われました。ラジオは御座敷の違棚に置いてあり、姉と弟三人正座して聞きましたが、この時は天皇が何を言っているのか理解することができませんでした。後に大人になって聞いた時には内容がよく理解する事ができました。近所の人々も家に放送を聞きにこられ、『戦争に負けた。今からどうなるのだろうか』と言ってありましたが、だれもはっきりした事を言う人はいないようでした。その日は空襲が全然なく、子供心にも『戦争に負けた事をもう敵側も知っているのか、早くわかるものだ』と思ったことと、ぬけるような青空のよい天気だった事が思い出されます。連絡はありませんでしたが、あくる日学校で何かあるかも知れないと姉や近所の友だちとって見ましたが、先生達もおられず、帰って来ました。今思えばよくもああいう生活ができたなということと、幼い子供6人を育てるのは両親も大変だったろうと思われま。

学童疎開の経験は幸いにもありませんが、久留米から田舎に一家で疎開される人、都会から久留米に疎開して来られた人もありました。家の電灯には黒い布がかぶせられ、『灯りが外に漏れると敵機に見つかるから』と大変でした。町では『空襲の時家が立てこんでいると火災が広がるから』と家の立ちのきと家こわしもありました。防火演習とってバケツリレーで火を消す練習や、学校では避難訓練とって防空頭巾（綿入りの座布団を2つ折りにした様な帽子）

をかぶって机の下に入る事などをしたが、『こんな事をしてたすかる事ができるのかな』と子供心にも思っておりました。戦争末期には竹槍で敵軍をつく訓練も大人達にはありましたが、『敵は銃やピストルを持っているのにこんな事をしても敵をやっつける前にこちらがやられてしまう』との声も聞きました。

戦争だけはどんな事があってもしてはならない。これだけは肝に銘じております。戦争とは破壊だけだ。建設的な事も進歩もないと思っております。